

公益社団法人日本山岳会創立120周年記念事業

# ヒマラヤキャンプ2022登山隊 プンギ(6524m)遠征報告書



BCにてプンギをバックに。左から加々見、後藤、安達

## 目次

目次	1p
はじめに	2p
メンバーリスト	4p
登山概要	5p
行動日程	6p
食料報告	7p
医療品・保険報告	8p
会計報告	9p
装備報告	11p
輸送報告	12p
支援報告	13p
山行報告	14p
メンバーの感想	19p

## はじめに

### ■ヒマラヤキャンプを始めた動機

ヒマラヤキャンプは、ヒマラヤを始めとする海外登山の分野で、私が先輩方から受け継いだものや自ら経験してきたことを、できる限り後輩たちに伝えていきたいと思い、2015年に始めたプロジェクトである。私事ではあるが、信州大学山岳会2年のときに休学をし、当時未踏峰であったラトナチュリ(7035m)登山隊に参加させていただいた。まだ登山経験は浅く未熟であったが、先輩方が受け入れてくださったことで実現した初めての海外登山。そこで先輩たちから多くを学び、かけがえのない経験を積むことができた。このときの経験が今日の礎となっている。

しかし時代は流れ、社会人山岳会や大学山岳部等の既存組織の弱体化が進み、先輩から後輩へ受け継がれていた技術や経験の継承が途絶えるようになってしまった。このことに危機感を持つようになり、経験が浅い若年者がヒマラヤ登山を経験する場、登山経験を積み上げる場としての受け皿が必要であると考え、このプロジェクトを立ち上げることにした。これまでに、2015年秋、2016年秋、2018年春の3度にわたってネパール・ヒマラヤに赴き、下記の通り実績を積み上げてきた。

2015年 ランダック(6220m)東面からの初登攀(3名)、ランシャール(6224m)第二登(2名)  
2016年 ロールワリンカン(6664m)全員初登頂(6名)  
2018年 パンカールヒマール(6264m)全員初登頂(6名)

2019年に、プロジェクトをより持続的なものとするため、日本山岳会創立120周年記念事業として受け入れていただいた。育成事業は一過性では効果がなく、継続が求められる。そのためには、個人ではなく組織のプロジェクトでなければならないと考えた。日本山岳会は日本で最も歴史がある山岳会であり公益社団法人でもあることから、その受け皿に最もふさわしいと考え、受け入れのお願いをした次第である。今後も日本山岳会がこれまで積み上げてきた歴史や知的財産を次の世代に継承し、他国山岳団体との連携や各支部各委員会等のネットワークを活用して、組織的に次世代の支援をしていただきたいと考えている。

### ■ヒマラヤキャンプで実現させたいこと

ヒマラヤキャンプを通して具体的に実現させたいことは、次の3点である。

#### ①ヒマラヤ未踏峰登山のチャンスを作ること

これだけ情報化が進んだ世の中で、情報がないということは最高の贅沢であると思う。有名な山は登山者が多く、多くの登山記録や写真・映像が存在し、事前にあらゆる情報を得た上で登山を行うこととなる。しかし未踏峰は未知の要素が大きく、現地であらゆる判断をして行動を起こさなければならない。山の難易度に関わらず、この経験は未踏峰でしかできないかけがえのないものである。ヒマラヤキャンプでは未踏峰に挑戦することにこだわりたい。

#### ②海外登山に関心がある若手が集う場を作ること

既存組織が弱体化していることから、海外登山の意欲はあってもパートナーに恵まれない若手が存在する。そんな若手が集う受け皿を作り、さらなる活動のきっかけになるような場を作りたい。

#### ③費用を含め、できるだけ手厚いバックアップができる組織体制を構築すること

私も学生だった頃は、個人負担金を最低限に抑えていただき、経済的な参加ハードルを下げたことでヒマラヤが近づいた。できるだけ手厚くバックアップすることで初期の活動を支援し、継続的な活動につながるよう支援体制を構築したい。

これらを継続的に行い、我々が先輩登山者から受け継いできた登山文化を、若手にしっかりと継承できるプロジェクトにしたい。

## ■ヒマラヤキャンプ2022を振り返って

この登山計画は、もともと2020年春に実行する予定だった。ところが新型コロナウイルス感染症のパンデミックにより、数回の計画延期ののち、いったん中止を余儀なくされた。当時のメンバーも身辺の状況が変わり、プロジェクトから離れる者もいた。しかし今回のリーダーを務めた後藤と加々見は、様々な状況に翻弄されながらも粘り強く気持ちを保ち、新しくメンバーに加わった安達とともに2022年秋に登山を実行した。まずはこの2年半もの間、気持ちを保ち続けた2人を称えたい。

またこれまでのヒマラヤキャンプと大きく異なる点は、私がヒマラヤに同行しないということだった。しかし今回のメンバーはそれをチャンスと捉え、3人で挑戦する道を選んだ。これまでディスプレイで見ていたプンギという山を目の当たりにし、高所ならではの薄くて冷たくて乾いた空気を実感し、自分たちでルートを定め、登山計画を立てて、そして実行した。結果としてプンギの頂上を踏むことはできなかったものの、間違いなく言えることは、彼らは本物の経験をしたということだ。帰国後に聞いた話などから、私が同行するよりも大きな学びと経験を積むことができたのではないかと思った。この経験を経た彼らの今後の活躍がますます楽しみである。私自身もプロジェクトを始めて以来、メンバーとの距離感や関わり方について常に悩みながら進めてきたが、今後もメンバーとの会話を重ね、より良い関わり方を模索したいと思う。

最後になりましたが、この登山を実行するに当たり、多くの皆様方から多大なるご支援を賜りました。このご支援のおかげで、3人のメンバーはかけがえのない経験と学びを得ることができました。心より御礼申し上げますとともに、2023年以降の活動にも変わらぬご支援とご声援をいただけましたら幸いです。

日本山岳会創立120周年記念事業  
ヒマラヤキャンプ プロジェクトリーダー  
花谷 泰広

## メンバーリスト

花谷 泰広 (はなたに やすひろ)  
プロジェクトリーダー  
※カトマンズまで同行

後藤 希介 (ごとう きすけ)  
役割：リーダー・医療保険・食糧

加々見 太地 (かがみ たいち)  
役割：支援・記録・渉外

安達 正貴 (あだち まさき)  
役割：装備

## 事務局・留守本部

柏 澄子 (かしわ すみこ)  
日本山岳会常務理事

## エージェント

Kangri Trek(P)Ltd.  
Naxal, Bhagwati, Bahal, KumariMarg, Kathmandu, Nepal  
TEL:00977-1-4414633,4414644  
E-mail:kahangritrek@mos.com.np  
代表 Pasang K Sherpa

# 登山概要

後藤 希介

山の名称：ブンギ  
山域：ペリ・ヒマール  
緯度・経度：28°49'49"N ,84°24'02"E  
標高：6524m

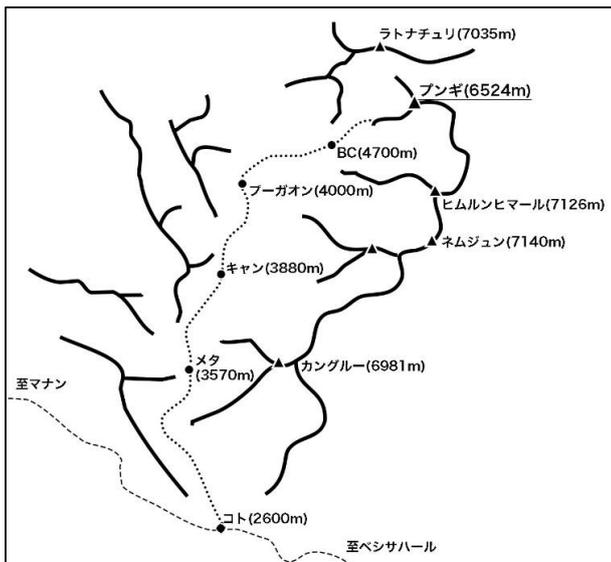
ブンギ(6524m)は、ペリ・ヒマール山群にある国境稜線上の未踏峰である。近くにはラトナチュリ(7035m)、ギャジカン(7038m)、ネムジュン(7140m)など、過去に日本隊によって初登頂された山がいくつかある。

カトマンズからは、ベシサハールを經由しコトまで車で移動し、そこから最終の村ブーガオンまでトレッキングとなる。ブンギの山容は、北峰、南峰、最も高い本峰が聳える。私たちは、一番の弱点と思われる南峰西尾根から本峰頂上を目指した。

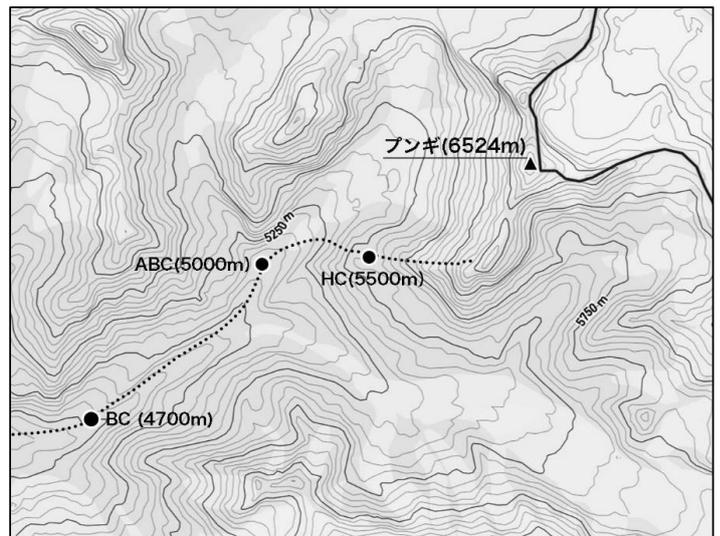
## ネパールにおけるブンギの位置



## コト→ブンギまでの行程



## BC→山頂までの行程



# 行動日程

後藤 希介

日付	合計日数		行動
9月28日	1日目	カトマンズ準備	成田→カトマンズ
9月29日	2日目		装備点検・ブリーフィング
9月30日	3日目		装備点検・パッキング
10月1日	4日目		ブジャ・自由行動
10月2日	5日目	キャラバン	カトマンズ→ベシサハール760m (車移動)
10月3日	6日目		ベシサハール→コト2600m (車移動)
10月4日	7日目		コト→メタ3570m
10月5日	8日目		メタ停滞
10月6日	9日目		メタ停滞
10月7日	10日目		メタ停滞
10月8日	11日目		メタ→キャン3880m
10月9日	12日目		キャン→プーガオン4000m
10月10日	13日目		プーガオン→BC偵察→プーガオン
10月11日	14日目		プーガオン→BC4700m
10月12日	15日目	登山期間	BCレスト
10月13日	16日目		ABC偵察
10月14日	17日目		ABC5030m設営→ABC
10月15日	18日目		HC偵察 5400mタッチ
10月16日	19日目		BCレスト
10月17日	20日目		BCレスト
10月18日	21日目		BC→ABC
10月19日	22日目		ABCレスト
10月20日	23日目		ABC→HC5500m荷上げ・設営
10月21日	24日目		HCレスト
10月22日	25日目		HC上部ルート偵察 6030mタッチ
10月23日	26日目		HCレスト
10月24日	27日目		サミットプッシュ 6150mまで
10月25日	28日目		HC→BC
10月26日	29日目	BCレスト	
10月27日	30日目	バックキャラバン	BC→キャン
10月28日	31日目		キャン→コト
10月29日	32日目		コト停滞
10月30日	33日目		コト→ベシサハール (車移動)
10月31日	34日目		ベシサハール→カトマンズ (車移動)
11月1日	35日目	片付け・出国準備	装備片付け
11月2日	36日目		休養日
11月3日	37日目		ブリーフィング
11月4日	38日目		バクタプル観光
11月5日	39日目		自由時間
11月6日	40日目		装備片付け・ヒマラヤキャンプMTG
11月7日	41日目		自由時間・出国準備
11月8日	42日目		カトマンズ→成田 (11/9着)

## 食料報告

後藤 希介

食料は、予備日を含む12日間の食事を用意した。私は、高所ではあまり食欲がなかったが加々見と安達は食欲は落ちず、期間いっぱいまで登山をすることになったら足りなかったように思う。

高所登山では、順応するために食べる事と同じくらい飲む事も重要だと教えて貰ったので、味がついていて飲みやすい物を余るくらい持って行ったが、結果的に丁度いい量だったと思う。また、高所では食欲も落ちやすいので飲み物で栄養を取るのには理にかなっているように感じた。

キャラバン中やBCは、味に飽きてしまう事もあるので、マヨネーズや柚子胡椒などの調味料があると充実すると思われる。BCでの食料や食事は、基本的にサーダーのダワさんに用意を頼んだ。

反省点としては、ドライフルーツが硬く食べにくいことに加えて、結構重くアタックに持っているのが躊躇われた。高所においては、たくさん食べると消化器に酸素を使ってしまう為、少しずつ食べられるように工夫すると思われる。

山行中は、尾西食品株式会社様に提供して頂いたアルファ米を主食にした。軽くて、高所では1袋100gが丁度よく感じた。行動食には、味の素株式会社様に提供頂いたアミノショットが固形物よりも飲みやすく非常に重宝した。アクエリアスの粉末は、サミットプッシュの際に飲んだが非常においしく、もっと量があってもよかった。

総じて、食料に関しては、満点とはいかないものの可もなく不可もなくといったところで特に問題はなかったかと思う。

	食材	品名	数量	重量 (g)
キャラバン ↓ BC	カレールー		1 箱	200 g
	本だし	味の素	1 箱	450 g
	ふりかけ	各味	5 種類	300 g
	醤油	キッコーマン	1 本	500 g
	梅干し		1 パック	500 g
	柚子胡椒		1 個	70 g
	あわせ味噌		1 パック	500 g
	餅		1 袋	1000 g
	あんこ		1 個	500 g
	プロテイン		1 袋	1000 g
サプリメント		1 日数分	500 g	
山 行 中	アルファ米	尾西食品	39 袋	3300 g
	吸い物	永谷園松茸のお吸い物	9 袋	100 g
	味噌汁&お茶漬け	永谷園お茶漬け、あさげ・ゆうげ	9 袋	150 g
	カップヌードルリフィル	日清カップヌードル	45 個	3600 g
	フリーズドライ	アマノフーズ各味	9 個	300 g
	切り餅(薄切りタイプ)	サトウの切り餅	6 袋	1000 g
	ドライフルーツ	マンゴー・レーズンなど	4 袋	3600 g
	ソイジョイ	大塚製菓ソイジョイ各味	24 個	1000 g
	アミノバイタル	アミノバイタルGOLD	108 本	500 g
	飴	フルーツキャンディ	5 袋	200 g
	柿の種	亀田の柿の種ノーマル・梅味	12 袋	1000 g
	砂糖		1 袋	1000 g
	ナッツ類		5 袋	3600 g
	ビスケット・クッキー		5 袋	3600 g
チョコバー・エナジーバー		5 袋	3600 g	
飲 料	アクエリアス粉末	アクエリアス粉末48g	10 袋	480 g
	レモネード	meito レモネード440g	2 袋	880 g
	アップルティー	meito アップルティー470g	2 袋	940 g
	スープ	コーンスープ・ポタージュ	3 袋	300 g
	珈琲	ネスレスティックタイプ	1 袋	300 g
	甘酒	甘酒粉末タイプ	3 袋	300 g
	ミルクティー	meito ミルクティー370g	2 袋	740 g
	お茶	煎茶・ほうじ茶各1袋	2 袋	500 g
	ココア	meito 香り高いミルクココア500g	1 袋	500 g
合計重量				37010 g
日本購入品重量				25210 g
ネパール購入品重量				11800 g

## 医療品・保険報告

後藤 希介

今回のヒマラヤキャンプも過去の遠征と同様に、榊原嘉彦先生と橋本しをり先生に医薬品を提供して頂いた。用法用量や注意点を併せて記載して頂いたので適切に使用することが出来た。

ネパールでは、水や食べ物によってお腹を壊すことが多いと聞いていて、口に入れる物についてはかなり気を付けた。提供して頂いた医薬品以外に、チョコラBBやビオフェルミンを普段の食事の補助として飲んでいたおかげか、ベースキャンプに着くまでは、特に体調を崩すことなく進めた。高所では、乾燥によって咳が出やすくなりフスコデ配合錠や痛み止めのロキソプロフェンなどは使用する機会が多々見られた。

HC(5500m)に着いたあたりから、安達が高山病で苦しい時を過ごすことになった。アタックの日はとても寒い日に当たってしまい、登るルートが西面という事もあり直射日光がほとんど当たらず、私は足の指に1度未満の軽度の凍傷を負ってしまった。下山には影響がなかったものの、日本に帰ってもしばらく痺れは続いていた。

品目	数量
ケトプロフェンテープ20mg 日医工 7枚入り	10
包帯	2ロール
紙テープ・テーピングテープ3種	左記の数
救急バン100枚	1
フラジール内服錠250mg	20日分
セノシド錠12mg	20日分
フスコデ配合錠	60錠
三角巾	1
ポルタレンサボ	30個
ロベラミド塩酸塩カプセル1mg	30日分
ダイアモックス錠	15日分
ニフェジピンCR錠20mg	10日分
レボフロキサシリン錠	20日分
シルキーボードレッシング	11枚
トラベルミン配合錠	30錠
ブリンペラン	20錠
レバミピト	30錠
トワチーム	60包
ロキソプロフェン	60錠
ミヤBM	63包

## 保険

後藤 希介

保険会社：三井住友海上火災保険株式会社  
死亡の際の保険金：1,000千円  
後遺障害の保険金：1,000千円  
治療・救援費用：5,000千円  
賠償責任：100,000千円

保険料一人当たり支払い額：135,490円

今年のヒマラヤキャンプで最も苦戦したものの一つに海外登山保険契約の締結がある。コロナウイルスの影響により、海外登山に対する条件が厳しくなっているため、保険契約の締結は容易ではなく、何社も連絡をしたが、いい返事を聞くことが出来ず苦労した。1ヶ月後に遠征を控えた頃、日山協山岳共済会様に連絡が付き、なんとか締結することが出来た。

## 会計報告

加々見 太地

### 【収入】

隊員個人の負担金：30万円×3名＋花谷（登山無し）15万円＝1,050,000円

協力企業収入：2,300,000円

日本山岳会：1,000,000円

日本山岳会会員内寄付（2022年9月16日時点）：650,000円

-----  
収入合計：5,000,000円（2022年10月時点）

### 【支出】

#### ◆国内支出

国内準備費（装備費、食料費、その他備品費）：85,248円

通信費（インリーチ通信料。本体は花谷購入）：41,350円

航空券費（4人分。1人平均237,872円）：951,490円

保険費（日山共3人分）：407,812円

-----  
国内支出合計：1,485,900円

#### ◆国外支出

ネパールビザ（隊員90日\$125×3、花谷15日\$30×1）：66,935円（\$405）

装備、メンテナンス費：17,854円（Rs.15,890）

カトマンズ滞在費（食費、交通費、通信費、雑費）：226,401円（Rs.201,497）

エージェント支払い（カトマンズ宿泊費、車移動費、手数料、登山費、国立公園入園、ネパール人スタッフ日当、ロバ代、装備レンタル、保険等）：1,770,910円（\$12,038）

食料品等購入費：36,915円（Rs.32,854）

キャラバン宿泊費：161,753円（Rs.143,960）

チップ：90,449円（Rs.80,500）

-----  
国外支出合計：2,371,217円

支出合計：3,857,117円

### 【収支】

収入合計：5,000,000円

支出合計：3,857,117円

-----  
1,142,883円

残金は報告書作成経費やヒマラヤキャンプの継続的プロジェクト予算に運用。

※\$1=147円（2022年9月時点）、1円=Rs.0.89（換金時のレート）で計算。

出発前の経費計算書によると、以下の経費を見込んでいた。

国内経費1,576,470円

国外経費2,886,950円

-----  
総経費4,463,420円

国外経費のうち500,000円はコロナウイルス等による緊急時の対応費用（今回は使用せず）として計上していたので、それを差し引いた総経費は3,963,420円となり、実際の支出金額3,857,117円とほぼ近接した。

過去のヒマラヤキャンプ隊や2020年の計画当初から比べると、ほぼ全ての項目が値上がりしており、航空券が2倍以上、物価高、円安等によって、経費計算書の金額は膨れ上がった。予算金確保のため、プロジェクトリーダーである花谷さんを中心として、さまざまな企業様に要請して協賛金を集め、日本山岳会会員の皆様に寄付を募ることにより、十分な予算金を用意することができた。また、以前よりヒマラヤキャンプの遠征をアレンジしてくれていたコスモトレックがコロナ禍の煽りを受けて営業していなかったため、カングリトレックにエージェントを変更したことにより、予算計画も併せて変動した。

ヒマラヤキャンプのゆうちょ口座にて予算金を管理しており、今回はインターネットバンキングであるゆうちょダイレクトを開設し、リモートでの予算管理と、入出金の見える化を行った。PCで経費計算書や出納帳を作成し、Google Driveで共有した。ゆうちょの1日で引き出せる限度額が50万円なので、出発前に計画的に引き出しを行い、分担して現金を持ち出した。ネパールでは手書きの会計ノートに支出をつけ、領収書を貼り付けて管理した。領収書をもらえないような支出も多くあるので、その都度メモしておき、1日の終わりに記帳していった。結果的に予算がオーバーすることはなく、無事に遠征を終えることができた。

Google Earthの衛星写真で大まかな山容を確認し、メンバーで協議し装備の選定を行った。我々が目指したプンギにはロッククライミングギアが必要となるような岩壁はなく氷河と雪稜を詰めていくことを想定した登攀装備に絞った。

以下BCまで運んだ共同装備

登攀具	品名	規格	数量
	クライミングロープ	8mm/60m	2
	クライミングロープ	7.7mm/60m	1
	FIX用ロープ	7mm/60m	2
	FIX用ロープ	6.5mm/25m	2
	スノーバー	T型	5
	アイススクリュウ	19cm	2
	アイススクリュウ	16cm	5
	アイススクリュウ	13cm	3
	ピトン	ナイフ	7
	ダイニーマスリング	60cm	16
	ダイニーマスリング	120cm	9
	ダイニーマスリング	180cm	5
	カラビナ	ノーマル	36
	カラビナ	安環	7
生活具	BC用テント	3人用	3
	ABC用テント	3人用	1
	HC用テント	3人用	1
	ツェルト	2~3人用	1
	BC用シュラフ	UDD800	3
	HC用シュラフ	UDD600	3

BCまで口バによる荷上げがあるため登攀具は多めに運び、選択肢を増やすことにした。プンギの全容を確認した後、ピトンやアイススクリュウなどの登攀ギアはそこまで必要無いと判断し、数を減らしてHCまで上げる事にした。実際にHCへ持っていったのはスノーバー4本、ダブルロープ8.0mm×60m2本、スクリュウ16cmが各1本で3本、ピトンが3本、アルパインドローが各2本で6本。

今回実際に使うギアは多くは無かったが、全容が分からず、情報が少ない山では多めにギアを持っていき良かったと感じている。

また、テントは株式会社アライテント様、シュラフは株式会社ナンガ様に提供いただき使用した。

### 日本→カトマンズ

装備、食料等のネパールへの持ち込みは、事前の国際輸送は行わず、全て自分達の航空便の預け荷物、手荷物で行った。

#### ●航空会社預け荷物重量上限

花谷 マレーシア航空 40kg

後藤・加々見 ネパール航空 35kg (2つまで可。1つあたり上限が32kg)

安達 タイスマイル 20kg

安達の航空便の預け荷物上限が少なかったため、事前に個人装備を花谷さんに持ってもらおう対応をした。ネパール航空はウェブサイトには上限35kgとしか記載がなく、マカルー80リットルをパンパンにして空港に持ち込んだが、実際にチェックインカウンターにしてみるとひとつ当たりの上限が32kgで、2つまで(2つ合計の上限が35kg)預けられることが判明した。少し超過していたが、その場で荷物を分担しあい事なきを得た。預け荷物の条件詳細は事前によく確認されたい。今回の預け荷物の条件でちょうどよかったため、これ以上荷物が増える計画の場合は、事前の輸送などの手段を講じる必要があるだろう。

### カトマンズ→BC

カトマンズのデポされていた共同装備すべてを広げ、日本から持ち込んだ装備と合わせて、ベースキャンプまでの輸送するためのパッキングをしなおした。BCまで展開しない荷物、キャラバン中に各宿泊場所ごとで毎日展開する荷物、個人用の水筒やレインウェア、現金などの常に携行する荷物に分けた。基本的にロバが運搬するので、電子機器などの精密品は青樽に入れ、防水ダッフルに入れた荷物も、全て大きなビニール袋に梱包した。どの荷物に何が入っているかをメモして把握しておくといいだろう。ひとつ当たり30kgが上限で、ロバの背に左右2つ括りつけるので、それぞれの荷物の重さが均等に近づくようにした。

カングリトレックの見積もりでは当初ロバは8頭だったが、結局10頭になった。キャラバン中は大雨での停滞もあり、BCまで必要ないと思われた荷物を度々開梱せざるを得ず、サーダーであるダワさんや、キッチンボーイのラズディンの手を煩わせてしまった。キャラバン中に必要になる荷物は意外と多く、パッキングの際にはもっと考慮すべきだろう。



## 支援報告

安達 正貴

ヒマラヤキャンプ2022は以下のスポンサー様、サポーター様にご支援頂きました。  
心より御礼申し上げます。

### 【スポンサー】

株式会社ゴールドウイン様  
日本用品株式会社（スポルティバジャパン）様  
株式会社インパクトトレーディング様  
カシオ計算機株式会社様

### 【サポート】

株式会社アライテント様  
株式会社ナンガ様  
尾西食品株式会社様  
味の素株式会社様

### 【医薬品提供】

榊原嘉彦様  
橋本しをり様

### 【天気予報提供】

猪熊隆之様

順不同で記させていただきました。  
加えて多数の個人のご支援も賜りました。  
重ねて御礼申し上げます。

## カトマンズ準備、キャラバン→BC/9月28日ー10月11日

9月28日にメンバーがカトマンズにて現地集合。翌日から遠征の準備に取り掛かり、10月2日にカトマンズを発ちキャラバンをスタートした。今回の遠征は過去のヒマラヤキャンプとは違い、プロジェクトリーダーである花谷さんとはカトマンズで別れる事となる。

1日目はハイエースに乗り込みベシサハールまで9時間の道のり。2日目はジープに乗り換え、悪路を5時間半かけ、車に入れる最後の街であるコトに到着。標高は2600mと一気に高くなる。ここからようやく歩きでのキャラバンとなった。翌日はメタ(3570m)まで移動するも夕方から天候が崩れて雨が降りしきる。天候が回復せず3日間の停滞が余儀なくされた。メタでは後藤が高度の影響か少し体調が優れない模様。

ようやく天候が回復し10月8日にキャラバンを再開。途中の村キャン(3880m)でもう一泊し、最後の村であるプーガオン(4000m)に到着。翌日にプーガオンからBCへの偵察を行うも、安達は高度障害により途中で引き返し、後藤と加々見で偵察を行う。ブンギへと続く谷の入り口になだらかで広い台地を発見しBCをそこに構えることに決め、一旦プーガオンに戻った。ダワさん達はそのままBC設営に入った。翌日雪が降る中BC(4700m)へ移動する。カトマンズを出て9日目である10月11日にBC入りをした。予定よりも時間がかかってしまい心の奥底に焦りが始まった。



荒天でメタで停滞



最後の村プーガオンへのトレイル

## ブンギ偵察/10月12日

翌朝テントから出ると青空の下、目標の山であるブンギが初めてその姿を見せる。事前にGoogle Earthで見っていた印象とは異なり、ギャップをはらんだ細く長い稜線が延びていて、緊張感を覚える山容であった。午前中にBCの整理をし、午後からは順応も兼ねて偵察を行う。BCから続く台地を300mほど標高を上げるといよいよブンギの全容があらわになった。

ブンギは北峰と南峰、そして一番標高が高い本峰と3つのピークがあり、当初計画していたルートの内、北西尾根から北峰を経由し本峰を目指すルートは、北峰直下が急峻なためすぐに選択肢から除外し、南峰から西に延びる尾根に取り付くこととした。まずその尾根の取り付きに1つ目のキャンプ(Advanced Base Camp)を、尾根上5500m地点のコルに次のキャンプ(High Camp)の設置をひとまずの目標にした。



BCから初めて見たプンギ

#### BC偵察/10月13日

後藤は体調が優れず、加々見と安達でABCの偵察を行う。南峰西尾根の取り付きに向けて谷をつめていくが、両岸が脆く時折落石が発生し肝を冷やした。ゴーロと積雪で歩きづらく、アップダウンを繰り返す消耗の激しい道程だった。途中で安達が頭痛を訴え始めてペースが落ちるも、5000mを越えたところで広大な平地が現れた。周りの斜面からも距離が取れ、水も取れる事からこれ以上ない適地だと判断し、少しの荷物をデポしてBCに戻った。

#### ABC設営/10月14日

後藤の体調も回復し3人で荷上げを行う。荷物は20kgと少しのはずだが高所の影響でいつも以上に荷物が重く感じる。ばてないようにゆっくりと歩きABC予定地へ向かい一泊した。安達はなかなか順応が進まず、頭痛に苦しんでいる。



ABCの設置風景

#### HC偵察、BC帰還/10月15日

HC予定地の偵察へ5500mのコルに向けて登りだすも、数日前までの大雪の影響でひたすらにラッセルを強いられた。踏み固まらないモナカ雪に体力を削られる。また日射の影響で雪崩のリスクもあり、長居は危険と判断し、5400m地点で引き返しBCまで降りた。



HCの偵察、5300m地点

### BCレスト/10月16日-17日

荷上げで受けたダメージをしっかりと癒すために2日間のレスト日を設けた。衣服の洗濯やシャワーを浴び心身ともにリセットを行い、サミットプッシュまでの作戦を3人で検討する。各キャンプ間の登降は消耗が激しく、往復する回数を少なくすべきだと思い、ワンプッシュで山頂を目指すことにした。

### BC→ABC/10月18日

いよいよサミットプッシュのローテーション開始。予備の分も含めて9日分の食料や燃料でかさんだ荷物は30kg近く、荷上げでの体力消耗が激しかった。休憩を多く挟みながらゆっくりと歩き、順調にABCに到着。

### ABCレスト/10月19日

前日の荷上げで若干の疲労感はあるものの5000mまではメンバー全員の順応も進んでいる。テント内で明日以降の行程を話し合い、緊張感も高まってくる。

### ABC→HC/10月20日

ABCは山の西側にある為、午前中は日が入らず、寒い中準備を済ませて早々に出発。5300mを越えたあたりから後藤と安達のペースが上がらず、安達はまたしても頭痛を訴える。加々見がひたすらにラッセルをし2人を引っ張り、正午に5500mのコルに到着。予想通りコルは平坦で安全な幕営適地であった。その先の登路も想定よりも緩やかで、頂上稜線までは難しくないラインで繋がっているように見え、登頂の可能性が十分にあるように思えた。



HC(5500m)から見えるブンギ  
左の岩壁が北峰、中央が本峰、右が南峰

### HCレスト/10月21日

荷上げでの疲労が大きく、順応も兼ねてレスト日とした。安達はHCに着いてから頭痛が続いておりかなり辛そうであった。後藤と加々見は余裕があった為テント場から80m程トレースをつけに上がり降りてきた。メンバーで話し合い、翌日に上部ルートを探査し、翌々日にサミットプッシュをする事に決まった。プンギ登頂へのラインを見定めつつ、翌日の行程に備えて早めに就寝した。

### 上部ルート探査/10月22日

プンギ登頂にはまずHCから南峰まで上がり、そこから長い稜線を経て本峰へと至る。南峰までトレースをつけに3人で歩き出すも、5880mで安達が頭痛でダウン。そこに登攀具などをデポし、後藤と加々見で6030mまでトレースをつけHCへと帰着した。想定よりも雪が悪く、ラッセルでの疲労や安達の高山病などがある為、翌日にレスト日を設けて、サミットプッシュを1日遅らせることにした。



上部ルート探査、日が入る前から行動を始める

### HCレスト/10月23日

西尾根のコルに設置したHCには日が入るのが遅く、朝はとても冷え込む。レスト日とした今朝はテント場に日が当たってからゆっくりと起床した。翌日のサミットプッシュの前にメンバーで最後の協議を行った。明らかに安達の順応が進んでおらず、安達はHCで待機し、後藤と加々見のみで行くことになった。苦しい決断ではあったが、高所登山の経験も知識も少ない私達ではリスクを最小限にとどめるべきだと判断した。

### サミットプッシュ/10月24日

午前2時に起床しHCを出発した。順調に歩を進めるも、夜明けと共に風が強まってきた。周囲が明るくなっても西面を登る我々には日が届かずとても寒かった。5880mのデポ地点まで進んだ所とところで、後藤に高度障害が出てきて、ペースが落ち始める。HCに着いてから食が細くなった後藤は体が熱を作り出せないようで、足先に凍傷の気もあるようだった。ゆっくりと進み続けるも6000mを越えると、後藤と加々見に顕著に差が開き始めた。加々見が先頭に南峰直下の雪壁を1人ラッセルし続けるも、6150m地点にて後藤の限界を迎え敗退が決まった。南峰を抜けても本峰までの稜線はまだ長く、致し方ない判断であった。安達の待つHCへと帰着した。



サミットプッシュ当日、6100m地点



撤退地点(6150m)より

#### HC→BC/10月25日

翌朝、既にHCに着いてから5日目になり、肉体的にも精神的にも疲れた体に鞭打ってHCを撤収しABCへと歩きだした。ABCも撤収し、2回に分けて荷上げたキャンプ2つ分の荷物を1度で持って降りなければならないため、とても過酷な荷下げとなった。途中何度も休憩を挟みながら何とかBCへと帰還し泥のように眠った。

#### バックキャラバン/10月26日-31日

BCに帰還してからは、今回の山行の反省点を洗い出し、改善点を協議した。1日ゆっくりと休養した後、荷下げのロバが到着し、4日かけて上がってきた道を2日で降りきった。およそ25日ぶりに車道やネット環境のある町まで降りてきて、安心感に包まれながら眠った。コトで後発のロバを1日待ち、その後は2日間悪路に揺られてカトマンズへ到着し、我々の遠征が終了となった。

## メンバーの感想

### 後藤 希介

ヒマラヤ登山は、登山を始めた頃からの夢であった。当時、20代半ばだった私は、何も知らないながらヒマラヤ登山を目指した。山岳会に入会し山について学んだが、ヒマラヤ登山を実践している山岳会は、今ではほとんどなく、そんな折りに山岳会の先輩にヒマラヤキャンプの存在を教えて頂き興味を持った事がこの遠征に参加する第一歩だった気がする。2019年の1月に次期ヒマラヤキャンプのミーティングをする機会があり初めて加々見と会って、そこからトレーニングをするようになった。その頃から考えると、加々見の成長は素晴らしく、こうして一緒にヒマラヤ登山を実践出来たことは感慨深い気持ちなる。

さて今回のプンギ遠征は私にとって、初めての海外登山という事もあり、全体像がイメージしにくく準備の段階からバタバタと慌ただしい時間を過ごした。なかなか決まらない保険の問題や、急激な円安、物価高も重なり、それに伴い予算が逼迫したり、依然として新型コロナウイルスは蔓延していたりと、出国するまでは「本当に行けるのか？」と不安になることもあった。

ネパールに着いてからは、比較的順調に進んだが、キャラバン中に悪天候で3日間の停滞があったりと思うように進まない現状に辟易とする場面もあったが、そこでの3日間の停滞があったからこそ、その後の行程は比較的高山病にも悩まされず進む事が出来たように思う。

生まれて初めての高度に私は、食欲は細くなり、体調を崩すことも多かったが無理はいけないと言いつつ聞かせ、登頂の可能性が1%でも上がるように考えていた。BCからは、特に食欲が減り、ダワさんのおいしい料理も食べるのが辛く減らして貰う事が多かった。

BCに着いた翌日、初めてプンギの全容を見ることが出来た。こちらの面からプンギを見た写真はなく、Google Earthで見えてきたのっぺりしている写真とは違い、大きくて雪が多く、これだけ体がうましく動かない高所において、「本当に登れるのか」と思ったのが第一印象だった。しかし、偵察を重ねていくうちに不明点が解消されていき、わからないことが解消されていき徐々に期待が持てるようになってきた。この未知の部分を少しずつ解消して行く感じは、未踏峰ならではのもので楽しい時間であった。

ABCを設置し、荷上げや高度順応を行った後、7日間かけて頂上を目指した。HCの上の偵察した時、安達が高山病で登れなくなり、そこで私と加々見の2人でサミットプッシュをする判断をした。遠征を経験した今だから思う事だが、ここで一度BCまで戻って仕切り直していたら、安達も回復し結果は変わっていたかもしれない。

サミットプッシュの日、体の調子は良かったように思ったが、朝食を吐きそうになったり、偵察の時よりも動けない感じから、そうやって思うようにしていただけないかもしれない。6000mを越えても頑張らなくてラッセルをやってくれる加々見に何とか追いつこうと試みても、体が全く言う事聞かず、最終的には大きな声も出せなくなるほど消耗していて、笛を吹いて呼び止めた。加々見を呼び止めることは即ち、遠征の終了を意味していて自分の至らなさでここで遠征が終わるかと思うと何とも言えない気持ちになった。

今回のプンギ遠征は、山頂こそ踏めなかったものの非常に多くの学びがあった。ホントに辛かった荷上げ、空気の薄さ、疲労具合、天候など実際に行ってみないと、わからない事を身をもって経験することが出来た。次回遠征に行くことがあれば、今回の反省や経験を踏まえて、次こそは成功させたい。

## 加々見 太地

やっと行くことができた。2020年に行くはずだったプンギ遠征がコロナウイルスの世界的流行によって延期になって2年がたち、ようやく実行に移せた念願の遠征計画だった。コロナ禍の間、山やクライミングには足繁く通ってはいたが、渡航制限や水際対策が続く中で、実現可能性の定まらない遠征計画を、具体的に押し進めていくことは簡単では無かった。けれども、ヒマラヤキャンプの仲間達とは頻繁に登っていて、度々のオンラインMTGで近況報告や情報共有を欠かさなかったおかげで、アイドリング状態を保つことができた。2022年秋の遠征実行を決定してから、一気にギアを上げ準備を進められたのは、細々と活動を続けていたからこそだ。まだプンギも未踏峰として残されていたのも幸이었다。

ネパールに飛びカトマンズの雑踏に踏み込んだ時、BCから初めてプンギを目の当たりにした時、未踏の稜線に自らのトレースを刻んだ時、今までの長い道のりを思って、いちいち喜びを感じてた。ディスプレイの前でひたすら想像していたことが、今日の前の現実として、自分の身体で感じることでできる。Google Earthで見ていた生ぬるい姿と違って、実物のプンギは荒々しく、堂々としていて、無限の情報量に満ち満ちている。いくら吸い込んでも胸を満たしきることのない薄い大気も、どこまでも続く踏み抜き地獄の雪稜も、苦しくも美しかった。撤退した6150m地点から、山頂へと続く光景が今でも目に焼きついている。どっしりとしたプンギの山容、彼方に広がるアンナプルナやダウラギリといった8000mの峰々、自分達が刻んだトレースと、その先の前人未踏の雪壁。今回はそれ以上進むことができなかったが、山頂に到達するイメージは描くことができた。その喜びをどれだけ想像したことか。だからこそ悔しかったし、自分達がここまで積み上げてきたものの確かさと至らなさを学び得ることができた。

「行ってみなければわからない」。良くも悪くも、まさにそのことを痛感した山行だった。未知の領域に自分達の判断でもって道を拓き、キャンプを設置して行って、6150mまでトレースを伸ばしたことは、とても自由で創造的な行為として、印象深く身体に刻まれている。そこから見た景色も、その先にあり得たかもしれない登頂の可能性を想像することも、実践するまでわからないことだらけであった。登頂の成果こそ得られなかったが、高所登山のタクティクスやヒマラヤ登山の計画から実践までの流れを経験できたことは、本当に良かったと思っている。この経験を活かして、次なる実践としてまた海外の大きな山へと行ってみたい。

最後に。

今回の挑戦の機会をつくり、支えて頂いた全ての方々に感謝致します。また、個人的にサポートを頂いた株式会社ガスアズインターフェイス様、株式会社アルティコ様にこの場を借りて御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

## 安達 正貴

私にとってヒマラヤ登山は憧れであった。漠然とした情報しか得ていなくても、いつか自分も挑戦してみたいと考えていた。しかし、昨今のコロナ禍で海外への渡航が難しくなり、いつしかその情熱は下がり気味であった。そんな時にリーダーである後藤希介さんからヒマラヤキャンプへ誘って頂き、このチャンスは逃すべきでは無いと二つ返事で参加を決めた。

そこからはあっという間の日々を過ごした。国内で3人でのトレーニングや遠征準備などを行い、9月末に日本を発った。初めてのネパールは驚きが多く、刺激的な毎日だった。キャラバンも毎日目まぐるしく変わる景色を楽しみながら、まだ見ぬ未踏峰への期待と緊張を胸に歩いた。途中で悪天に捕まり3日間の停滞を余儀なくされた時は心の奥底に焦りを感じた。少しずつ標高を上げながらゆっくりと歩き、いよいよ4000m台に乗った時はまるで登山を始めて間もない頃と同じ高揚感を感じたことを今でも覚えている。いつかと憧れていたヒマラヤの道を今自分が歩いていると思うと自然と笑みがこぼれた。順調に歩いてはいたが、BCに入る前の最後の村から少しずつ高山病の症状が出始めて、ここまで動けなくなるものなのかと愕然とした。日本では感じたことが無い頭痛と戦いながら、雪が降りしきるBCに入り、翌朝テントから出ると晴天の下に目標としていた山、プンギが見えた。初めてプンギを見た時はその堂々たる山容に感動した。いよいよ未踏峰への挑戦が始まるのだと胸が高まった。

そこからはどのルートから登るのが登頂の可能性が高いか、サミットプッシュまでの日程や行程を練り合わせ、偵察を行い、ABCを設置など、3人で手探りながら着実に1歩ずつ山頂へと近づいて行き、自分たちだけしか居ない贅沢な環境を心から楽しめた。しかし、標高が上がるにつれて、私は高山病の症状で頭痛が酷くまともに歩けなくなっていた。深呼吸しても息苦しく、歩く度に頭に鈍痛が走りとても辛かったのを覚えている。

いよいよ山頂へのプッシュを目前に控え、最後にメンバーで話し合いを行った。「ここまで3人で歩いて来たが、安達の体調や隊のリスクを考えると安達はHCで待機せざるをえない」。2人からそう言われた時は心で色々な感情が混ざり合い、3人で歩きたい気持ちや、自身への不甲斐なさ、山頂へ挑戦できない悔しさに涙が溢れた。それでも2人への最大限のサポートをする事で自分の役割を全うしようと切り替えた。

翌朝2人の出発を見届けてテントから双眼鏡で様子を見ていたが、自分が今あの場に居ないことが本当に悔しく、涙をこらえた。結果的には、私たちヒマラヤキャンプ2022年隊は初登頂が叶わなかったが、日本では味わえない高所での登山、未踏峰への挑戦、ヒマラヤの広大な山々など何ものにも変えがたい、貴重な経験が出来たと感じている。今回の経験と今でも胸にある悔しさを糧に、またヒマラヤへ挑戦しに行きたいと思っている。

最後に、私達を支援・応援してくださいました企業様、皆様に心から御礼を申し上げます。誠にありがとうございました。